生きる

ー創り手たちの１年ー

チームＯＢ運営委員会

はじめに

本冊子、「生きる」～創り手たちの１年～ は 2019 年の１年間を通して、ひらがな商店街アートスペース「と」を拠点に活動した若者たちの創作活動に向き合う想いやそこでの多くの人との出会いから繋がる出来事などを作品の紹介を中心に「チーム OB」がまとめました。ものづくりを通してそれぞれのクリエイターたちがどう生きていこうとしているのか、何を目指しているのか、日々、自らに問い続けながら創作をしている姿勢がみえてきました。
下町の小さな一つの拠点で繰り広げられた物語は多くの出会いを生み、人を繋ぎ、さらにはクリエイターたち自身の気づきや生き方そのものを見つめることとなりました。同時にまちなかのこうした小さな拠点の存在の価値や果たす役割もみえてきました。

（「チーム OB」は生きにくさを感じていた若者たちが、多くの人たちに支えられ、認められた体験を次の世代に伝えていこうと、次世代の若者の就労や自立の支援を目的に 2015 年に発足した団体です）

チームＯＢ運営委員会

この冊子は第６８回ＮＨＫ歳末助け合いの助成金を受けて作成しました

もくじ

「生きる」あおしぐれ
見谷優唯・高貝紗希・菅野翔太
「つきしみの学校に出会って」
土佐 愛子
「アートスペース”と”の世界」
松井 このみ
「古典芸能とアートの世界」
吉岡 京子
「舞踏をはじめた理由(わけ)」
角津 麻由
「ラッピングで繋がる」
弓野 えり
「医学の道を目指して」
金子 倫花

生きる

- 創り手たちの１年 -

「生きる」あおしぐれ

見谷優唯・高貝紗希・菅野翔太
mitani yui　takakai saki　sugano syota

「生きる」あおしぐれ　見谷優唯

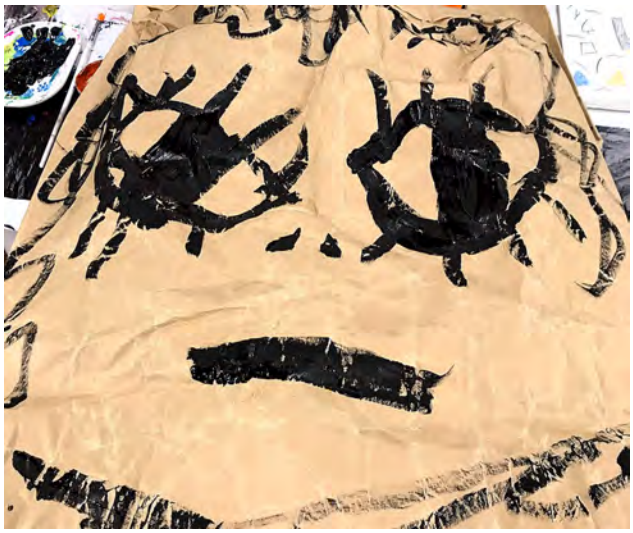
青いアコースティックギターを買った１５歳の冬。
愛読書はギターの教則本とバンドスコア。
学校には行かなかった。
思い返せばどうしようもない理由だった。
夢中だった。
起きている間はずっとずっと弾いた。
気づけば抱えたまま眠っていた。
ギターはまっくらな毎日から抜け出す唯一の灯火だった。
横浜に住みはじめて１２年くらいが経つらしい。
今も「音楽」と生活している。
変わらずにギターを弾き、自分の言葉で歌を歌う。
あの頃と違うのは、一人じゃないということ。
一人じゃない、と思えるほどに、たくさん好きな人や場所ができた。
だから、やり直せるなら。
やり直しても、私は同じ選択をしたい。同じ人たちと出会いたい。
あの後悔も必要だった。
過去の自分の選択を、自分の意思で正解に変えていきたい。
生きる。
それは、戻れないこと。
何を書こうか、何を想うか、タイムリミットまで頭を抱えた。
歌詞を書くのと同じくらいに。もしかしたらそれ以上に。
そんな時
「そのままがいい」
「そのままでいることがあなただ」
と言われた。
自分以上に見せようとしたり
「何か」や「誰か」になろうとしたり
変われない、変わりたい、と葛藤したり。
きっとまた忘れてしまう。その度に思い出したいと思う。
そうだった。またかっこつけようとしてた。
そのままでいいんだった。
最後に
「青時雨」という夏の季語がある。
雨上がりの葉っぱから水滴が落ちる情景の名前。
まるで涙が流れ、乾いていく、美しい瞬間。
雨上がり、白くぼんやりと差し込む光でありたい。
今を生きて、人生を描く、我々の音楽の名前が「あおしぐれ」です

「生きる」あおしぐれ　高貝紗希

私は今「あおしぐれ」という名前で音楽をしています。あおしぐれは、ギターとうた。ベースとコーラスの２人組で私はベースとコーラスを担当しています。
ベースの音は一見聴き取りづらく、影が薄そうだけれど、本当は緑の下の力持ちで居なくなったら寂しい存在なんです。
私は産まれつき心臓に疾患があります。中学生になった私はテニス部に入部すると決めていました。ところが、病院の先生からドクターストップがかかり、運動量の少ない吹奏楽部に入部することにしました。
そこで私はユーフォニアムという吹く楽器を担当することになりました。音を出すのが難しく、やっと１つの音が出せるようになった頃、また病院の先生から「長く息をはき続けるのは危険！」とドクターストップがかかってしまいました。
体育を欠席するのは当たり前。だからテニス部に入れなくても、そりゃそうか！と受け入れてきたけど、と思っていた私にその時の吹奏楽部の先生が「辞めたくないなら吹かない楽器があるパーカッションとコントラバスどっちが良い？」と聞いてきました。私は混乱して、上手に聞き取れず「２つ目のやつ！」と答えたもを覚えています。目の前に現れたコントラバスはヴァイオリンを大きくした見た目でカッコ良くて、落ち着く低い音で、すぐに「これがやりたい！」と決めました。
今思えば出来ないからこっち、と決めてきた中で、初めて自分でやりたいと思えたものでした。私はこの身体で産まれてこれた事を本当に感謝しています。両親にもちゃんと伝えたい。じゃなきゃ、ベースにもあおしぐれにも出逢えなかった。
私は自分自身あおしぐれの音楽に心を揺らされています。ベースを始めたきっかけは心臓で、ベースを続ける理由はあおしぐれです。
どうか届きますように

「生きる」あおしぐれ　菅野翔太

産まれてすぐにあった景色を見てみたい。
泣いて喜んでくれたひとの顔を見てみたい。
いい歳をした大人になった。
生きることの難しさを覚えて、
歳を取って、身体を悪くしたりもした。
それでもあまり変わらない、自分の奥の奥のこと。
それが時折怖くて堪らない。
まるで食べ物を胃液が溶かしてしまうように、
すべてを外へ出してしまえる日が来るのだろうか。
今はまだ、来ない気がしている。
だけれど、どんな時間がかかってもそれを成し遂げたいと思っている。
嘘の種類をたくさん知った。
目につくかつかないかぐらいの嘘に気付いてないふりをしては、自分を守る為だけにつく嘘のずるさを知った。
それらしい顔をして、その場しのぎで生きることの容易さも脆さも知った。
「そうゆうもんだよ」で片付けられるほど僕の心は簡単じゃない。
「これでもう終わりにしよう」と言いたくなる理由も衝動もどこかに失せた。
１０年間、歌をうたってきた。
１０年かけて理解できた、歌い始めた意味と僕のこと。
精一杯生きてます、歌っていますと言い切れることで笑ってくれるひとやありがとうと言ってくれるひとのことを守りたい。
僕のことを信じているというひとを信じ抜きたい。
本当は先回りしてそのひとを信じていたい。
そんなひとの数は多くはない。
だけど１人、２人ではない。
「そんなあなたのことが大切だ」と告げるその意味を、僕は忘れたくない。
「生きる」意味は多分ずっと分からない。
分からなくてもいいけど、生きている実感をずっと感じていられたなら。
その為にも僕は僕から目を離さずに、「大切」なひとたちのことをちゃんと見ていなきゃ。
３３歳の自分、稚拙と言われたとしても、ひとの生き方にパターンもカテゴリーもタイプもないと思っている。
生きることが自分だけの道を造る。
終わりがくるその時まで、
僕が僕でいられますように。



「つきしみの学校に出会って」

土佐　愛子
tosa　aiko

「つきしみの学校に出会って」　土佐　愛子

「つきしみの学校に出会って」
①楽しいと思ったこと
・寿地区での合唱の練習（線路は続くよどこまでも、ビリーブなどをみんなで歌ったこと）
・12月、「と」での初めてのライブ鑑賞（アコークローさんたちによる、ポール・マッカートニーやジョン・レノン、そしてオリジナル曲の演奏と歌唱）
・同年代の瀧脇さんや中学生のタクト君と北海道の五稜郭にまつわる話（新撰組たちが最後の戦いを行った場所（今は中に入ることもできる）をしたこと。
②怖いと思ったこと
・寿町（二度目）に小林さんと行った時、町の暗さとそこに住む人たちの持つ空気感に汗をかいた（一匹の猫との出会いもあった、少しやせていた。）
③できるようになったこと
・映画などのストーリーを短くまとめて口で言えるようになったこと。（本の要約をしているからかもしれない）
・自分と年の近い、または年上の人とも少しずつ話せるようになってきたこと。（個人で活動している人や寿町の人々に支援をする人などいろいろな人との出会いがあった）
・自分一人で横浜のルミネや上大岡にある映画館「東宝シネマズ」、郵便局などへ行けるようになったこと。
④嬉しいと思ったこと
・「と」に来た時にほっとできると感じられること。さまざまな仕事や生き方をしている人に出会えること。他の人から頼られていると感じられること。人の温かさを感じられたこと。(くしかつ屋のご主人や合唱サークルのみなさん、「と」の調理担当石井さんなど)
「と」やその周りにいる人たちに出会って、楽しいと思えることが増え、前よりも積極的に人と関れるようになったこと。そこに住む人同士の結びつきや優しさをたくさん感じられたこと。
「人のために自分の力を使う」ことや「人の良いところを見る」ことができたこと。
⑤今年頑張ったと思うこと
今井さんと私の母と一緒に有隣堂の本社へ行き面接をしてくれたスタッフさん達に「本の魅力を自分の書いた紹介文で多くの人に伝えたい！」という思いをしっかり伝えられたこと。
⑥意識していること
なるべく自分から相手に話しかけること（相手の関心ありそうな話題について、できるだけ話をつなげていくこと、相手の好きなことをたくさん聞くこと、など）

「つきしみの学校に出会って」
ー貴重で重要な最高の教育環境ー

娘は、６か月の早生まれ、たくさんの方々に支えられて、命をつないできました。そんな娘も成人し、今、自分が生きる道を探しています。行きづらさを抱え、過ごしてきたこの２０年は、決して平坦な道ではありませんでした。娘のために良かれと思い、できることは何でもしてきたつもりですが、娘が心から笑顔になれる居場所を探すことはできず、半ばあきらめかけていた矢先に、今井さんとの出会いがありました。初めて、アートスペース「と」に伺ったのは昨年の夏。外観からも温かさが感じ取れるような佇まいで、中に入ると、たくさんの絵本と素敵なスタッフさんが出迎えてくれました。様々な年代の人が出入りしていて、みなさん、キラキラしていました。今井さんと初めてお会いした瞬間に、親子共々、その魅力に引き込まれました。全身から湧き出る包容力、安心感、そして、優しさと明るさ。「と」で、土曜日に行われているつきしみの学校のお話を聞き、それ以来、ほぼ、毎週、参加させていただいております。参加し始めて、数か月ですが、娘は、よく話をするようになり、確実に明るく前向きになっています。今まで、様々な療育機関に通ってきましたが、このような変化は初めてです。つきしみの学校には、○○プログラムという画一的なものはなく、先生方は、一人一人を尊重して、それぞれに最適な道を一緒に親身に考えてくださいます。何より、大好きな皆さんに囲まれて、安心して過ごせる温かい空間「と」でそこに集まる、魅力的な方々と接触し、たくさん話をし、自分の意見を聞いていただいたことが、娘に変化をもたらしたのだと思っています。親はどうしても子供のマイナスな面ばかりに目が行き、それを修正しなくてはと思ってしまいます。学校や職場などでの評価も、減点方式が一般的で、子供も大人も自己肯定感を得ることが難しく、その結果、寛容な心が育ちにくい社会であると感じます。このような社会構造の中で、つきしみの学校は、本当に貴重で重要な最高の教育環境です。

未来を作り上げていくすべての子どもたちが、安心して過ごすことができる居場所の確保や、子供たちのそれぞれの未来を親身に考えてくださる心ある方々の活動を全面的に支援することの重要性を痛感しています。このような活動が今後も継続的に、身近に行われるようになることを心から願うとともに、今井さんや「と」の皆さん、つきしみの学校の先生方に心より感謝申し上げます。

アートスペース「と」とは
ーつきしみの学校からー

「場の存在目的を創造できる場所」
人が集まる場所（特に公共スペース）は分断された役割を持っているし、
持たされていることが多い。公共から予算が出ている場合は尚更存在意義が
問われる時代だ。
駅は電車を利用するためにあり、病院は病めることをキュアするためにある。
郊外に並ぶチェーン店はどの支店であっても同じ味を提供する。
「あそこは、なんだったんだろうか？」
自分の中で役割の分類できない場所が必要である。

「と」は「と」として、確かにそこにあり、絵本カフェ・貸スペースという。
いったい、どんなサービスを提供しているというのだ。

そこに関わる人が空間の役割を創る。
テーブル、キッチンと絵本とその他、雑多のものが点在するこの空間の「つきしみの学校」に限っても、勉強したい人がいれば自習室になり、知らない大人がフラッとくれば取材現場になるし、子どもたちの考えた製品を売ると小売店にも変容する。彼らも気づかないうちに、「と」がどういう場所であるか、彼ら自身で演出し、そこでの役割を演じていく。

こうした遊戯性に、「と」の魅力があると思われる。
関わる大人たちの役割は、彼らが思い描く場を具現化するための適切な画材を与え、必要とあれば、画法を伝えることにある。
「と」には、こうした空間を演出させ、そこにやって来る人々との交流を、彼らの人生の中に作ってみることができる力があった。

遊戯に富む遊びの空間は、ふとしたキッカケで消失する。
子どもの頃、いたずらをした老人の家は、物理的にもう、その土地には存在しない。
本当にあったのかも今となっては定かでない。
彼らの人生に根付き、普段は明確には思い出せなくても 記憶の「傷」として、彼らの中で生き続ける、ある時その人生の助けとなればとっても嬉しい。

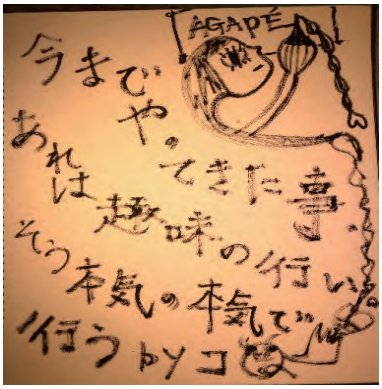
つきしみの学校スタッフ　小林　遼

「と」との出会い

松井　このみ（コQ）
matui konomi

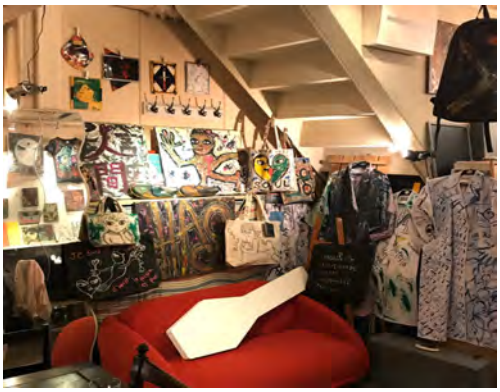
「と」との出会いと共存

ーご縁の始まり、繋がりと拡がりー



横浜に住む叔母とデートしながら立ち寄った
石川町　アートスペース「と」。
そこからのご縁が今に続いております。

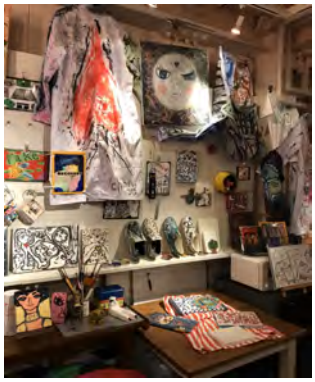
そしてそのご縁の広がりがまた続いていく形でどんどん繋がっていく。
共存できる場所であり社会につながる小さな一歩でも良いから携わっていきたい。
あれから一年後の今日、自分が横浜に居を移すとも想像しなかったし、今の自分も想像出来なかった。
けれども今この時がリアルで私はそこに生きている。



あるがままに。
横浜が愛しい場所になりつつあります。

「人間交差点ー汝自身を知れー」

ここは人間交差点。
みんな沢山の荷物を背負って生きていて、そんで羽を休めに来てる感じ。
少し休んでまた帰る場所に戻ったり、そのまま飛び立って行ったりする感じ。
全ての人が主役、脇役なんて居ない。
羽を休めてる間の束の間に見せる笑顔に本当が見えた。

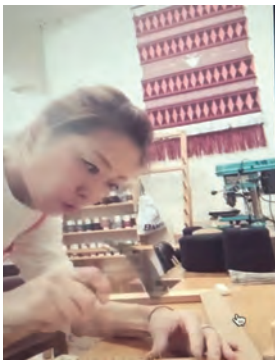


三日間かけての設営。まだ終わらず。
サグラダファミリアみたいに少しずつ構築。
アングラで穴倉でカオスになってます。
空間全体が作品なので体感していただけたらと。
本日から始まりですが、今日は 12 時から 17 時位まで居て
基地作りの続きをやっております。
『コ Q　vol.4』ひらがな商店街アートスペース「と」

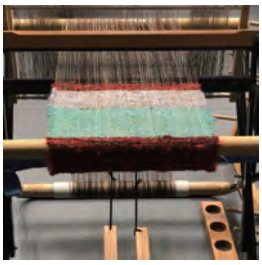
私は意味プーな事沢山喋ってます。
それからここに来る人はとりあえず濃い。
でもね面白いの、人が。毎日奇跡なのねん。

手しごと
ー手を動かすー

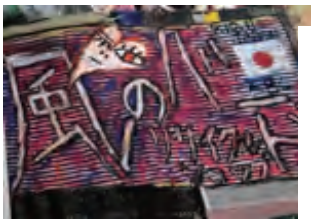
まずは道具作りから。
キャンバス用の木枠を買い、
枠を作り、サイズを決めて釘打ち。
作品作りの前の道具作りから。
手作業の原点的な。
出来る限りhandwork。
ホモサピエンスに出来る
handworkを試して見たい。

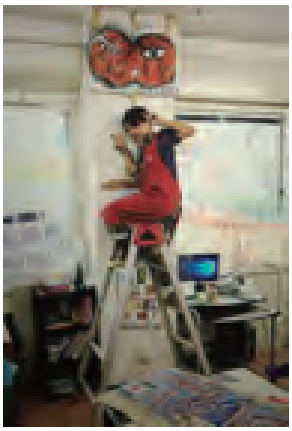


金曜日の過ごし方
炊き出し、風のバード。
朝は炊き出しで野菜カットチームに合流、
野菜切り終えたら一度そちらを後にして、
風のバードで仲間と作業。
昼には炊き出し配給と片付けでまた炊き出しチーム
に合流。炊き出し終了後は再び風バへ。とにかく手
を動かす。人と触れ合う。何かを感じて、
何かを学ぶ。FeelingがあってThinkingする。
こんな金曜日が最新の過ごし方。
風のバードでタペストリーを織る
道具を自作で作って、それを使って織りをする。
織りは祈りの作業に近い。
学びの時間はまだまだ続く



「風のバード」



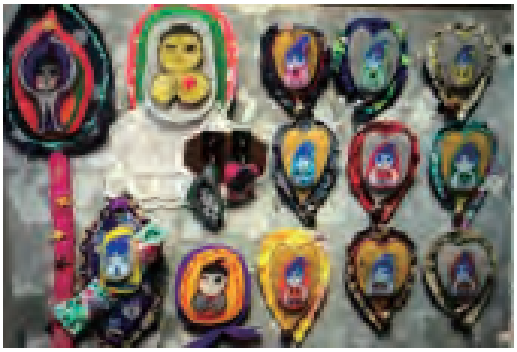


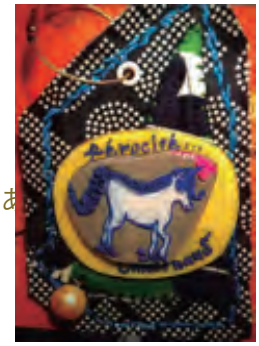
ホモサピエンスを愉しむの♥
人間はとてつもなく面倒な生き物である、と感じつつ、中でもとりわけ己が一番面倒な生き物であることを知る。
横浜に越してきて人と交わり、「間」を知り人間になる自分。
行き着くところはホモサピエンスの魂。日々です日々。学びしかない。沢山のホモサピエンス魂から愛を頂いてる日々。
風のバードってところは仲間たち各々が好きなことして過ごしてます。てんでバラバラで。寝てる人ありぼっ～としてる人あり、手仕事をしている人あり、店番してる人あり。良い悪いとか正解なくただただ共存していて、そしてちゃんとぶつかったりもしてる。
私もそこに共存させてもらってるのです。

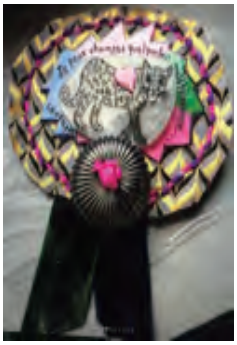
先週の金曜日。
金曜日は炊き出し→風のバード→炊き出し→
風のバードを行き来する日。
寿にどっぷり浸かるアタイ。
前日に風バのタケちゃんがハートを狂ったように描き始めたかと思えば、翌日金曜日は「絵なんか描いたことない」と言うトクちゃんが楽しそうに米袋に顔を描き始めた。
鼻の形が気に食わなくて赤茶の絵具で塗りつぶし、
気づけば褐色の女の子の顔が現れました。
ちなみにこれは私らしい。
名前を「コノミちゃん」と米袋に描かれた顔に命名してましたから。
まだ続くらしいです、
コノミのメイクアップは。
アートの楽しさ。
トクちゃんタケちゃんコノミの三人の作品です。
米袋は良いキャンバス、生きるってアートだす。
トクちゃんが笑いながら描く様が面白かった。

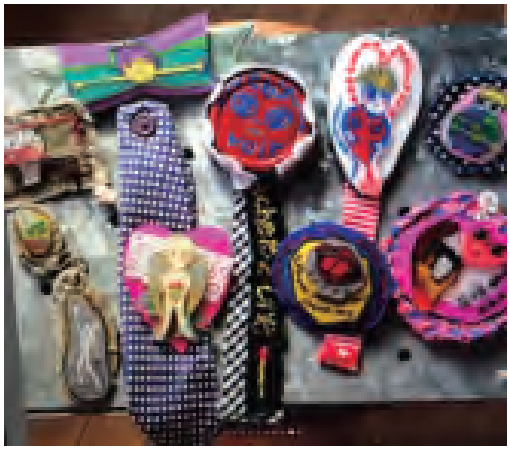
「ブローチ」

あの頃の私は、ブローチを作ることに
夢中だった。
記録されたそれらの一部を見返すと、
あの頃の自分に少し出会えます。
作ることの、造ることの、創ることの、
生み出すことの喜びを初めて知った
のだと思います。その先に今がある。
だとしたら今がその先にあることに
繋がるんだね。
よし、もっと魂の声に耳を澄ませて、
もう一人の脳に支配された自分と会話
してそしてどんどん変化してゆきたいね。あ
いまのわたしより。
byコQ







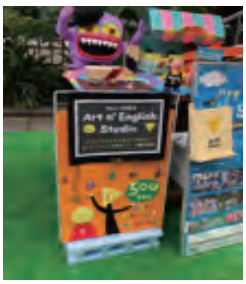


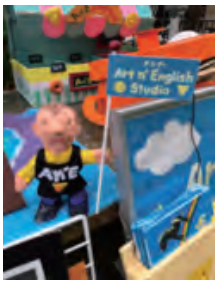
「関内外 OPEN!11」
ー道路パークフェスー

お知らせ君
11月3日(日)にライブペイントします。
横浜関内駅最寄り、関内桜通りの辺りで11時から16時まで。当日終わるまでどうなるか分かりませんが人生なんて先は読めん。
ただ魂で行うのみっす。いろんな催しがある中で感じたままに描きたいと。
一部の箇所に参加型でライブペイントする場を設けますんで。
アウトプットしにきてねん♥
手を動かすと魂が震えるよん。
文化の日　byコQ

其々の人の魂から、自分に在る魂を知る。
道路のパークフェス

さくら通り【道路のパークフェス】の一部で立体様式のライブペイント。参加型で描くことができます。テーマは♥アガペになりますので体験されたい方は「ハートの形を描く」でお願いします。ご自身の魂の形をフィーリングでハートの形に表していただけたらと思います。
11時から16時までを予定しております。byコQ





「全てはアガペなり」

ー人間交差点の軌跡は続くー

されど愛しき地球、されど愛しき人間なり。
外から見たら美しい星。
中にいるとストレスフルな星。。
幻滅をさせる人間、それでも愛も感じさせる人間。言葉で落ちて言葉で救われるホモ・サピエンス。
外からみたら青く美しいこの星に私は恋をしているのでしょうか？
そんなこたぁ分かりゃせんが、楽しき人生を送ろうではないか。
変化して変化してどんどん変化して、その先に何があるかなんて想像しないで、魂が喜べればそれでいいの。私は変化したい、いや変化するのだ。

今年の1月2月は悶々としていたように思っていた。
でもそれは違うと気づいた。
たぶん、もう自分が進む先が設定の段階にあったように今は感じる。「かくも愛しき人間なり。
私は私を介して、私の手を鼻を耳を目を身体全体を介して、その本質、すなわち『生』をたましいの役割を知るのだ」せっかくの今生、もっと自分を遊んでやろうと思います。

七夕の誓い　　byコQ

「古典芸能とアートの世界」

吉岡 京子
yoshioka kyoko

「花」と「と」

道を歩いていると、そこに一輪の花が咲いていた。
何気ない日常によくある光景だ。
ふと、その花に心をひかれて歩み読む。
花の香りを楽しみ、季節の流れを感じ、眺めながら
その花に似合う人のことを想う。

花と出会った日は、
空は晴れているかもしれないし、
暖かい日かもしれないし、
寒い日なのかもしれない。
それは町中なのかもしれないし、
誰かの庭か、公園か、
あるいはふと立ち寄った店の
ショーウィンドウの中なのかもしれない。

日々暮らしている中で、私たちは、
当たり前のように人と出逢い、花と出逢う。
それはありふれた日常風景ではあるけれど、
わくわくする奇跡の連続なのである。

お花の仕事をしていると、たくさんの笑顔に出逢う。それは花が生まれた時から魂と呼ばれる存在になるまで、命の尊さを教えてくれ、どんな時も人に寄り添ってくれるものだからだ。日常にさり気なく、当たり前のように存在しながら、花は人の心と心をつなぎ、場をつなぎ、心に安らぎを与え、素敵な縁を育んでくれる。

素敵な人や場所に出逢うと、私はいつも花が思い浮かぶ、この場所にはどんな花があうのか?
花にたとえたらどんな花だろうかと。
何気ない日常から感動する物事があり、
感動や発見から作品のイメージをふくらませ、
ふくらませたイメージと共に、人や場に添う作品を作り、
作品という形で、人や場、心や花をつなぐ。
空気や香り、音や光、色、形、、、全体の雰囲気、、、
空間を飾るときに私が大切にしているのは、
日常の中の風景として存在させるということ。

道を歩いていて、花に出逢うように、私は「と」と出会い花を飾ることになった。駄菓子屋さんのお菓子たちのように、色とりどりの小さくかわいい作品たちをさり気なくならべ、たくさんの子供たちが、楽しい想像力を膨らませたであろう、素敵な表紙の絵本やクリスマスToyたちに溶け込むように、そして、みんなの感謝の思いと未来への希望を、アンティックなトーンのバラの花に込めて。そこに集う人々の会話に素敵な花が咲きますように。
そして、人々の心に「と」のみなさんの思い出がそっと咲き続けますように。

そんなことを想いながら空間に花を添える。
これからも人の心と花をつなげていきたいと思う。

「舞踏を始めた理由（わけ）」

角津　麻由

tunozu mayu

「舞踏」に出会って

2017年10月に浅草を散歩中に路上で踊っている人を目撃した。それが初めて見た「舞踏」でした。

帰宅してから呼吸するのも忘れて、目(マナコ)を見開いて(!)検索しまくったのを覚えています。
それからたくさんの舞踏家の方を拝見して最後に流れ着いたのが「とりふね舞踏舎」です。

初めて大磯のワークショップに参加した時に「卵を立てる…」という時間がありました。

どのくらいの時間がたったのかわかりませんが立ったんです、卵が。
その時に「卵みたいに立ちたいなぁ」と思いました。

卵のようにスッと立ちたい…。うまく言葉にできませんが…。あの美しさみたいなものをカラダで表現したいと思いました。

とりふね舞踏舎はそれを教えてくれるところだと思いました。

舞踏を始めてから1年、とりふね舞踏舎をもっともっとたくさんの人に知って欲しい!!!
この想いは1年前も今も変わらぬ想いです。

そしてその想いを持ち続けることで、私が私を知ることができ、私が私に戻ることができています。

「ラッピングで繋がる」

弓野 えり
yumino eri

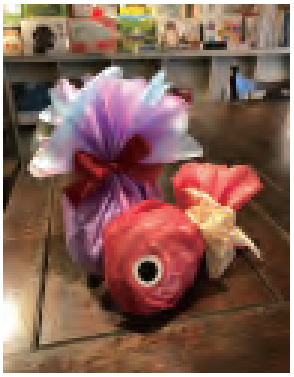
「輝くために！」

初めて「と」に来たのは２年前。
「と」はパールのネックレスの様でした。
何がパールのネックレスと感じさせたのか・・・？
それは、「輝き」です。
「と」は素敵にデザインされた輝いている「空間」でした。

「と」でたくさんの人に出会い、
輝きたいと思う人がこんなにいると知り、
一緒に過ごしていると、そんな時も楽しく頑張れてしまいます。
試行錯誤が楽しかったです！

とうとう、来てくださった生徒さんは
ラッピングデザイナーになりました！！

わたしも、輝きたいと思いました。
ただ、ただ、輝くために試行錯誤しました。
「素敵なあなたを何故崩すの？」
…と、心配をかけた時期もありました。
一度出来上がった自分をクリアにする
不安・・・・・。
新しい事を受け入る素直さ。
すごく、勇気がいる難しい事でした。



「と」でのラッピング教室は思っていたよりも若い世代の方々が来て下さいました。
オーナーのコーヒーやお茶菓子の差し入れに話が弾み、カルチャーセンターとは一味違うラッピング教室を開催させて頂きました。
生徒さんからは生活の中でラッピングを取り入れた写真を頂いたり、月謝をラッピングした封筒に入れて、持ってきてくださったり…。

「医学の学びを通して」

金子 倫花
kaneko tomoka

「私の生き方 2020」
ー大学卒業後ー

わたしは、早稲田大学で経済学を学び、自分のライフワークは社会貢献性の強い、影響力のある分野が良いと考え、卒業後ビジネスコンサルタントの仕事に就きました。
主にマーケティング戦略のアイデアを出すのが好きで得意でした。

ドイツ語クラスの先生とクラスメイト

一方で、大学時代にマレーシアでホームステイしたことがきっかけで、途上国支援に興味を持ち、仕事の合間に国連大学や外務省、世界銀行などの NGO 支援活動に積極的に参加するようになりました。そして平和学の修士号を取るために 1 年間スウェーデンに留学しました。帰国後はコンサルティング業界に戻り、エンジニアリング会社や技術ベンチャー支援をしたり、企業の社会的責任の普及のためインドに視察に行ったりもしました。しかし、社会に出てから、社会貢献性を重視し、一貫して「支援」という言わば裏方の仕事に注力してやってきたのですが、一抹の寂しさを感じていました。小さくても自分の世界で自分が主役になれるものが欲しかったのです。そんなときに出会ったエンジニアや技術職の方々がサイエンスの現場を熱く語るのを見て、自分に足りないものに気が付きました。自分の理念を形にする手段や技能、専門は、ライフサイエンス・生命科学の分野がいいと。

マサリク大学医学部正面

大学の教室風景

―新しい出発―

今年は、国際中医師の（中国の漢方ドクター）の資格取得に向けて、試験勉強に力を入れていこうと思っています。また、学んだことを臨床に活かせるようになるよう、引き続き色々な勉強会に参加していくつもりです。手始めに順天堂大学の勉強グループに入れていただけるよう打診中です。
昨年の後半に受講した薬科大学の上級コースでは、長春大学中医薬の先生方、イスクラ産業の中医師の先生方から、臨床現場の有益な方剤の知識を沢山もらうことができました。これは、本当にすばらしい体験でした。自分自身が長い間辛かった体調不良、体力低下や不眠、また耳鼻科に通っても根本治療できなかっためまいなど、薬科大学の講座で体質や養生方法が分かってきて、中華街で買ってきた生薬を自分でブレンドして服用したところ、少しずつですが目に見える効果が出てきたのです。そこでも、中国医学の凄さと底力を感じました。また、日本も昔から、中国から伝来して独自に発達した漢方治療があるはずなに、それが現代になり十分に活かされていないことが残念に思われました。
病院や薬に頼りすぎず、他の人にも健康の悩みを改善してほしいと思い、家族や身近な人たちの健康養生のアドバイスをしたり、ブレンドのお茶をあげたりしました。気が付くと、４０種類近くの薬草が揃いました。母も胸のムカムカが取れてご飯が美味しく食べれるようになったと喜んでくれました。

漢方は副作用が少ないものが多く、基本は植物性のものを使い、比較的穏やかな作用で長期連用可能なものを選び安全性を考慮しています。具体的な病名はないけれども日々何か気になる不調があるようなときでも、漢方は効果を発揮します。少しずつそれを飲んでみたいという人が身近に増え、勉強の合間にブレンドを作ってあげるようになりました。これからは、ブレンドを試してみたい方には小さい規模ですが事業として提供して予定です。

ーこれからの夢と目標ー

日本は今超高齢化社会に向けて予防医学が注目され求められる時期が到来しています。また生命科学の研究開発や医療技術の進歩により、治療の選択肢も多様化するような時代になってきていると思います。そのような中、健康は万人にとって大きな財産である一方、地域の身近なところに健康管理の相談役がいることは心強いでしょう。私はこれから同じ医療分野の関係者と連携して、健康管理のサポーターの１人として社会に貢献していけたらいいなと思っています。また、医学部留学の経験を活かし、中医学の中にもエビデンスの有無を確認したり、西洋医学や他の観点から研究され見出された有益な情報は垣根を超えて積極的に取り入れて、複合的に養生法などを提示してあげられることが自らの強みと考え、そのためにますます勉強に励みたいと思っています。そして、やはり、できるなら医学部を卒業したいという希望があります。そうすることで、自分が治療家としてできることが増えるためです。体力的に叶えられるかは分かりませんが、これからも果てしない夢を追いかけたいと思っています。

最後に、医学部の学費を出してくれた祖母、そして、医学部に進学したことを誰よりも喜んで、私に診てもらうことを楽しみにしながら留学中に他界した叔父、中医学への道を開くきっかけをくれた今井さん、そして応援してくれる友人知人に感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも引き続き夢に向かって一歩一歩がんばります！

生きる

- 創り手たちの１年 -

イラスト：コＱ
監　　修：YOSHIE IMAI
編　　集：KENTA MORIT
協　　力：KONOMIMATUI
：つきしみの学校
：有限会社サンアート
：ひらがな商店街アートスペース「と」

チームＯＢ運営委員会